

# いたいのいたいの 飛んでけ通信

発行 認定NPO法人病気の子ども支援  
ネット遊びのボランティア  
報告 坂上和子（保育士・社会福祉士）

## カナダのこども病院ボランティア視察ツアー報告 —患者と家族を中心とした医療とは—



右 The Hospital for Sick Children, (通称 SickKids) 2017年9月20日訪問  
左 Holland Bloorview Kids Rehabilitation Hospital 2017年9月21日訪問  
—公財 キリン福祉財団助成事業—

- ★参加者 13人
- ★神奈川こども医療センター
  - ①山下純正 総長
  - ②加藤悦典 コーディネーター
  - ③三木美雪 ボランティア代表
  - ④竹之内直子 小児看護専門看護師(通訳)
  - ★沖縄県こども医療センター
  - ⑤伊波邦子 コーディネーター
  - ★あいち小児保健医療総合センター
  - ⑥野川(布施) 智絵 保育士
  - ⑦金岡好 保育士
  - ★認定NPO病気の子ども支援ネットワーク遊びのボランティア
  - ⑧坂上和子 社会福祉士(保育士)
  - ⑨渡辺美佐子 アニマシオン
  - ★国立国際医療研究センター
  - ⑩渡辺麻野子 保育士
  - ★宮城県立こども病院
  - ⑪佐藤直子 コーディネーター
  - ★大阪府立母子保健総合医療センター
  - ⑫河盛久美子 コーディネーター
  - ★協力 ⑬関根和子 通訳・企画

**視察の目的を教えてください。**  
カナダはボランティア先進国です。そのシステムを学びに行きました。日本でも遊びのボランティアは増えていますが、直接生活に入っていくような親を含む支援までは及んでいません。カナダでは多様なボランティアがいます。なぜそれが出来るのか？を見てきました。

**どんな方が参加されましたか？**  
小児がん拠点病院の総長先生やボランティア代表、保育士らボランティアにも関わる方々と半数はコーディネーターです。一番印象に残ったことは何ですか？

病院は市民の協力があってQOLは向上するという事です。ふたつの病院に行きました。ボランティアをやっている人の話や、どんな人がその調整にあっているか。感心したのは「ファミリーセンタードケア」といって、患者と家族を中心にした医療が徹底していたこと。患者経験者をファミリーアドバイザーと呼び、今回は、実際に経験者の声を聞きました。患者中心の医療とはこういうことかと強い感銘を受けました。ボランティアはあらゆる形で存在しています。病院にきょうだいのためのプレイルームを作ったところに保育士を置いたり。そのため資金集めを専門にするボランティア団体があったことも驚きでした。病棟に学生が入って付き添いに休息を提供したり。「ボランティアは病院の宝です」と。

**これから何をしたいですか？**  
カナダに行く前に私達はお互い国内の病院を訪問しあいました。自分の施設以外を知り、さらにカナダを見て視野が広がりました。ボランティア組織を病院にしっかり位置づけることが必要でそのために、何が問題か、病院間で議論が必要です。

### ホーランド病院ボランティア活動

- ・病院の中にボランティアサービス部門がおかれていて、4人の常勤の専任の職員がいる
- ・ベッド75床にボランティア1200人が登録
- ・年齢構成 15~24歳が64%
- ・ボランティア部門の予算は全て寄付で運営され、1年間50万ドル。
- ・年間4回募集時期がある
- ・プログラムは30あり、外来業務、ライフスキル、ドナルドマクドナルドハウス、レスパイト、リサーチ、ペット、ファミリープログラム、サマープログラム(ミュージック、アート、プール)など
- ・サマープログラムは800人のボランティアが活動→3つのプログラムをそれぞれの病棟で実施
- ・ボランティアリクルートはwebで応募、面接45分、犯罪歴・既往歴
- ・ボランティアトレーニング→1時間のPCでのオンライントレーニングを行った後、2時間コーディネーターと実践的トレーニングを行う
- ・170家族がいて、そのうちファミリーアドバイザーは30人いる。病院の委員会にも出席する
- ・ボランティアサービスとして駐車場が無料、その他のワークショップへの参加などの特権がある
- ・きょうだいのためのプレイルームはマクドナルドによる寄付で作られたプレイルームの預かりは1日平均15人 休日は30人ほど。シフト制でAM PMに分かれ、2・5歳以上の年齢から預けられる
- ・庭で夏はキャンプが行われる

きょうだいのためのプレイルームはマクドナルド企業が出資している

### シックキッズのボランティア活動

- ・病院の中にボランティアサービス部門がおかれていて、4人の常勤の専任の職員がいる
- ・1日の平均入院患者数287人。ボランティアは年間1300~1500名が登録
- ・ボランティアの活動時間は週7日、午前、午後、夜間も
- ・寄付金はThe Women's Auxiliary Volunteer Programとして1993年以降1600万ドルが病院に寄付されている。2016年はショップの売り上げ4万5千ドルが病院に寄付された。この他きょうだいの遊び場プレイパーク建設時は2億ドルが別に病院に寄付された
- ・年齢構成 16~85歳が在籍(22歳以下:27%、23~29歳:47%)
- ・予防接種は自己負担(4抗体、Hb、結核、インフルエンザ)60~80ドル
- ・ボランティアプログラムは25あり、例として

The Women's Auxiliaryによるビーズプログラム。「こんなにたくさん治療を受けたのよ」と得意顔の少女!

- ①チャイルドライフ→子どもと直接関わる
- ②ホスピタルサポート→外来案内
- ③デスクワーク
- ④リサーチ、研究所の手伝い
- ⑤ペットセラピーなど
- ・高校生は夏休みに集中して個人・団体のボランティアもいる
- ・ボランティア人材部門では、人材を募集して採用した上で、働く上での感染予防、安全守秘義務などをトレーニングする
- ボランティアの顔写真入りの名札を下げることによって病院にボランティアを認識させる
- ・80人のファミリーアドバイザーがいてその内12人が18歳以下のこどものためのアドバイザー。委員会の役員などもつとめる
- ・何年働いたかで国、(連邦政府)から表彰される

Sickkids ボランティアは医療 team の一員である。ボランティアを行うにあたって、病棟では、CLS (チャイルドライフスペシャリスト) が相談役である。研究分野のボランティアの場合研究部の担当者がいて、それぞれに相談先がある。



新しいボランティアが活動を始める時は、経験のあるボランティアがメンターとなって一緒に活動する。ボランティアの活動のレベルでTシャツの色が異なっている。メンターは赤色。ヒューマンリソースは人材を集める部署で、学生のインターシップを受け、病院の人材にあがっていくようにする。資格をとり、研修やトレーニングを受け、ボランティアをすることは卒業後のキャリアにつながる。

①女性 A  
月曜は5Fで朝CLSに会って打合せ。歌をうたったり、あかちゃん抱っこをしたり、子どものゲーム相手。水曜は9Fフロアで0歳-10歳の子どもと外で遊ぶ。車椅子の子どもも来る。サムソンがスポンサーをしているスペースで家族に提供されている。

②男性B  
ぼくも内容が同じ。ボランティアは赤シャツの人は新人のボランティアに教えたりしている(バリウムシステム)。僕は1回辞めていた時期があり、再びボランティアになった。子どもが笑ってくれていることに意味があると感じている。きっかけは大学の時、気軽にウェブサイトで申し込んだ。子どもは病気と関係なくてワイルドな子どももいるよ。

③ 女性C  
移植の病棟で、患者に直接接するボランティア。治療をすると4週間は居るため患者もボランティアをよく知っている。17人の病棟に1人のボランティアが入る。家族の休憩のためにボランティアが入る意味もある。もう一つの私の仕事はリサーチで、今7つの研究をしている。患者研究では病気があてはまるなら研究の参加を呼び掛けることもしている。説明書を渡して、研究者を呼んで協力してもらおう。リサーチのボランティアは違う色のシャツを着ている。

ファミリーアドバイザーの話 (家族の経験を医療に生かす—Karen Haas—)



写真 家族の体験を話す Karen Haas さん

「家族の体験」ファミリーアドバイザー

Karen Haas

2002年 私の息子ロビンは2歳半のとき脳腫瘍と診断されました。24時間の手術で約80%取り出し、数週間の治療を受けました。シャントをして、家にもどったときは家にナースもおらず不安でした。その後、病院に戻り、中心静脈をいれて、化学療法を受けました。毒性が強い治療でしたが彼は勇敢でした。退院後は毎日通院して化学療法を受けました。数週間後、輸血が必要になり、化学療法がストップ。その後、6週間半放射線療法を受けました。毎週2時間かけての通院はたいへんでした。妹が生まれたとき、ロビンは兄になったことを自慢していました。このシックキッズではたくさんの科にかかり、自分の家のように。5歳半のとき、腫瘍が大きくなりまた1年、シックキッズにかかりました。この期間は治療も出来ず、怖かったです。再度、手術をしたときは耳が聞こえず、目が閉じず、顔面マヒが残って、きつい化学療法を140日ほど受けました。

妹も2歳になると一緒に過ごすようにしました。化学療法のために何回も病院にきました。ドクターから腫瘍は全部とりのぞいたと。その手術を乗り越えて6週間にわたり治療をしてからも、晩期合併症のため病院に通いました。その他にも治療があり、たくさんの人が治療にかかりました。息子は17歳で病院の治療を終え、2週間前からカルガリー大学で看護の勉強を始めました。息子は今ボランティアにも参加しています。私はファミリーアドバイザーとしてぜひ自分の経験を生かしたいと思い、このFAになりました。現在家族の経験と視点を大切に家族の話聞く役割をしています。医師、ナース、CLSと一緒に。どんな病院にしたいか、会議にも一緒に入ります。ほかのFAとニュースレターにも掲載し、何をしているかを皆さんに伝えていきます。新しくナースが入ると家族の立場、きょうだいのことも含めて話をします。この体験によって家族の絆が深まり、感謝しています。今は1日、1日がギフトと思えます。

カナダ視察の報告会のお知らせ

「ボランティアコーディネーターの会」

発足記念フォーラム

—病気の子供と家族のためによりよい療養環境目指して—

開催日時：2018年10月20日(土曜)

会場：神奈川こども医療センター講堂

基調講演 神奈川こども医療センター総長 山下純正氏

カナダの視察報告と沖縄、大阪、愛知、神奈川、宮城のこども病院のボランティアコーディネーターの報告も。飛行機・新幹線を使ってみえる方には宿泊と交通費の一部助成をします。問い合わせ

当 NPO 法人事務局 08055274379 (坂上)



参加者感想ひとこと

- ★ファミリーアドバイザーの存在は画期的。Karen Haasさんは息子さんの長い闘病生活から退院後までの、家族の立場からしか伝えられないことで助けていきたいといい、彼女から強いボランティア精神を感じた。
- ★ボランティア活動が病院に欠かせないものとして位置づけられ、組織化されていたこと、また患者と家族が医療の中心であり、ボランティア活動も患者と家族を支えるために徹底していたこと。
- ★両病院とも病院側が病院運営にとってボランティアを必要不可欠と捉えていた。
- ★世界でもトップクラスのこども病院を視察できたことは、小児系の看護を経験してきた私にとっては夢のような出来事。
- ★国全体が「ボランティアは当然」という意識とシックキッズのボランティア人数が1300~1500人という圧倒的な数とその約8割以上が学生というのが驚き。
- ★今回の視察でボランティアコーディネーター同士が知り合えたこと、日本でもお互い交流を深めたい。
- ★ビーズプログラム、「大変だったね」「かわいそうに」ではなく「がんばったね」「あなたは素敵」肯定的な考え方に感動。
- ★今回、自分のやっていることを客観視することが出来た。自施設では十分には出来ていないことが見えてきたり、コーディネーターとしての自身の不十分な実践も認識できた。
- ★「Child and Family - Centered Care」の実践として患者さんの経験に基づく意思・意見が医療に反映されていた事。
- ★今回の視察でこれまでのボランティアの受け入れ、考え方に大幅な変更が起こった。明確な理念のもとに、しっかりと教育活動が行われ、第三者認証まで。病院の組織もしっかりと関与していた。日本はまだまだ学ぶべきことがある。
- ★学生にとって学びと実践とがリンクしていること。
- ★建物から受けた印象がすごい。デザインーランドかUSJの一角かと錯覚するような心躍る場。外来の吹き抜け、いたるところにキャラクターのイラストがあり、エレベーターやサッシの色使いはおしゃれでカラフルで噴水や観覧車まであった。
- ★ホランド病院で、「ここまで来るのに20年かかりました」という言葉をファミリーアドバイザーから聞いて、制度を改めて行く道のりの長い歴史を知った。説得力のあるプレゼンテーションが印象に残った。
- ★この研修は、キリン福祉財団の助成金により実現した。ボランティア活動、NPOの推進には、企業の参加、助成が不可欠で、キリン福祉財団のお力添えにあらためて感謝した。